

①資料のタイトル

感染症と日本の前近代 ー天然痘・ペスト・梅毒ー

②資料本体（文字資料・図像資料）

舎人親王『続日本紀』

月岡芳年『新形三十六怪撰』「為朝の武威痘鬼神を退く図」

志水軒朱蘭『疱瘡心得草』「疱瘡神祭る図」

三条西実隆『再昌草』

③資料にかんする書誌・出典に関する情報（作者、作成年代など）

米国疾病予防管理センター（2022）『公衆衛生の実践における疫学原則（Principles of Epidemiology in Public Health Practice）』

青木正和(2010) 「連載企画」～結核に縁(ゆかり)の地歴訪～ 複十字 No.334

加藤茂孝(2010) 人類と感染症との闘い ー「得体の知れないものへの怯え」から「知れて安心」へー 第4回「ペスト」中世ヨーロッパを揺るがせた大災禍 モダンメディア 56巻2号

④生徒への問いかけ

**説明①** 新型コロナウイルスの感染拡大にともなって、感染症に関する用語を耳にする機会が増えた。「パンデミック」「エンデミック」もその1つであるが、いずれも感染症の流行段階を説明する言葉である。米国疾病予防管理センターが発表している『公衆衛生の実践における疫学原則（Principles of Epidemiology in Public Health Practice）』によれば、感染症の流行レベルを「エンデミック」「エピデミック」「パンデミック」の3段階に分けている。

**説明②** なお「エンデミック」とは、特定の地域内で起こる日常的・周期的に発生する感染のことを言い、その「エンデミック」が規模を拡大し、ある地域で予測を越えた感染数が発生することを「エピデミック」と呼ぶ。なお世界的な大流行を表す「パンデミック」は、この「エピデミック」が世界各地で起きている状態であることを言う。

**説明③** 日本で拡大した初めての「エンデミック」は結核であろうと言われている。鳥取県の青谷上寺地遺跡は弥生時代前期末（約2200年前）から古墳時代前期の初め（約1700年前）にかけて存在していた集落の遺跡であるが、出土した人骨からは日本最古の結核の症例となる脊椎カリエスの人骨も発見されている。

**説明④** 一方、日本で拡大した初めての「パンデミック」は天然痘であると言われている。文献史料で初めて感染症に関する記録があるのは『日本書紀』である。それによれば、実在していたと言われる初めての天皇である崇神天皇の時代（紀元前80年ごろ）に「天然痘」と思われる感染症の拡大についての記載がある。また585年には厩戸王（聖徳太子）の祖父に当たる敏達天皇が崩御したが、死因については天然痘によるものではないかとする説もある。

◀問①▶ 敏達天皇の死因の真相は不明であるが、「日本古来の神々をないがしろにしたための罰ではないか」という見方も広がった。敏達天皇が「日本古来の神々をないがしろにした」とされる理由について、〈表1〉を参考にしながら宗教の動きとその宗教の信仰をめぐる対立した有力豪族の動きを絡めながらあなたの考えを述べよ。

〈表1〉

世紀	年代	できごと
6世紀	538年	仏教公伝（ほかに548年と552年説もあり）。
	539年	欽明天皇即位。
	552年	物部尾輿が仏像を破棄。
	553年	欽明天皇が仏像を作らせる。
	572年	敏達天皇即位。蘇我馬子が大臣となる。
	585年	敏達天皇崩御。用明天皇即位。
	587年	丁未の乱で蘇我氏が物部氏を倒す。

説明⑤ 6世紀に広まった天然痘は以降も「エンデミック」として感染者を出し、『続日本紀』によれば735～737年にかけて日本全国に広まったことが記載されている。この天然痘の流行によって藤原不比等の息子でもある四子も相次いで命を落とした。四子の妹でもある光明子は、夫でもある聖武天皇に、全国の総国分寺でもある東大寺に廬舎那仏の建立を依頼したと言われている。

#### 【資料】

ア) 『続日本紀』の記載

735年5月の詔に、

この頃、災異しきりに起こり咎めの徴が現れる。

735年8月の詔に、

この頃、大宰府管内に疫病で亡くなる者が多い。病を鎮めて民を救うため、大宰府管内の天神地祇に奉幣し祈らせよ、管内の寺は金剛般若経を読み。使者を遣わせ病者に賑給 \*1 し湯薬を与えよ。長門より東の国の長官と次官は斎戒し、道饗祭 \*2 を祀れ。

\*1 賑給(しんごう)=給付のこと。ここでは、薬の配布を指す。

\*2 道饗祭(みちあへのまつり)=都や宮城の中に災いをもたらす鬼魅や妖怪が入らぬよう防ぎ、守護を祈願する神事のこと。

とあり、735年の春から夏にかけて天然痘が広がっていった様子が見て取れる。

イ) 月岡芳年『新形三十六怪撰』の「為朝の武威痘鬼神を退く図」(左:資料1)

ウ) 志水軒朱蘭『疱瘡心得草』より「疱瘡神祭る図」(右:資料2)

資料 1



資料 2



出典 資料 1：国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1306529>

資料 2：国立国会図書館デジタルコレクション <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2539520>

《問②》『続日本紀』に記載されている内容と、月岡芳年が描いた「為朝の武威痘鬼神を退く図」と志水軒朱蘭『疔瘡心得草』より「疔瘡神祭の図」を見て、人々が天然痘をどのような扱いへと変化していることが分かるかを述べなさい。

**説明⑥** 史上最大規模で流行したとされる「パンデミック」はペストである。東は中国、北はロシアや北欧、南はアフリカに拡大した。最終的な死者数は正確に把握されていないが、14世紀に流行したペストではヨーロッパ全人口の3分の1が命を落としたとされ、当時の人は「黒死病」と恐れた。

**【資料】** 日本においては、14世紀にパンデミックを引き起こしたペストの感染拡大がみられない。一方、中国では1331年に感染が拡大して人口が減少し、他国へも広がっていった。

〈表2〉

世紀	年代	できごと
13世紀	1274年	文永の役（1281年にも蒙古襲来＝弘安の役）。
14世紀	1331年	中国でペストが発生し、人口が半減する。
	1368年	元が滅亡し、明が建国される。
	1392年	高麗が滅亡し、朝鮮が建国される。
15世紀	1401年	足利義満により第1回遣明船が派遣される。
	1411年	明と国交を断絶する（～1432年）。

《問③》 日本ではペストの感染拡大がみられなかったものの、日本は16世紀にはいると梅毒の「パンデミック」に襲われた。日本へは、三条西実隆が著した『再昌草』に次の記載があることから、著された1512年に梅毒が入ってきたことが分かる。

道堅法師、唐瘡 \*1 をわづらふよし申たりしに、戯に、もにすむや我からかさをかくてだに口のわろさよ世をばうらみじ

\*唐瘡（からがさ＝梅毒のこと）

14世紀のペストは日本国内に入ってこなかったのに対し、なぜ梅毒は日本に入って拡大したのか。上の〈表2〉と大航海時代の世界の動きを絡めながら述べなさい。